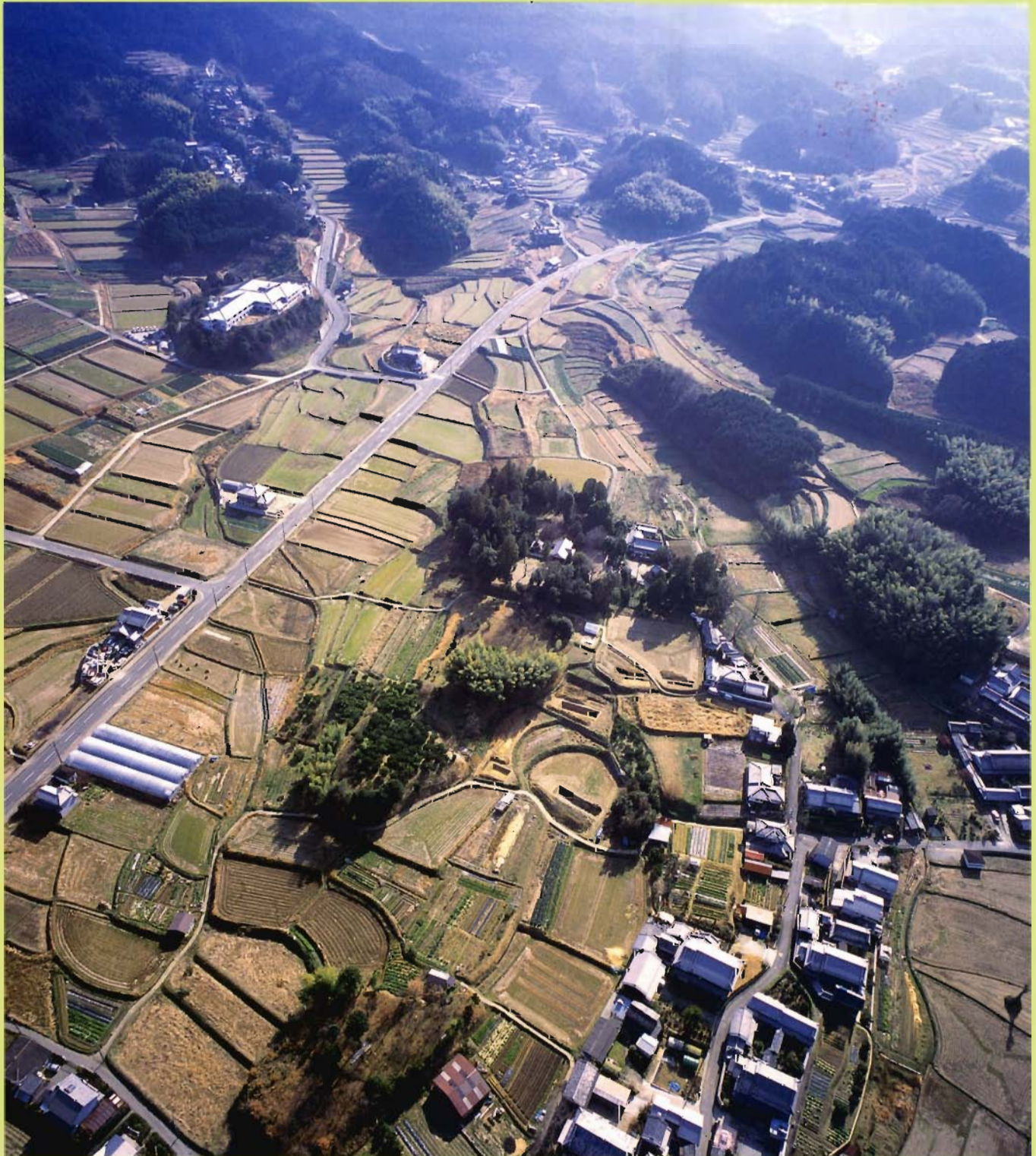


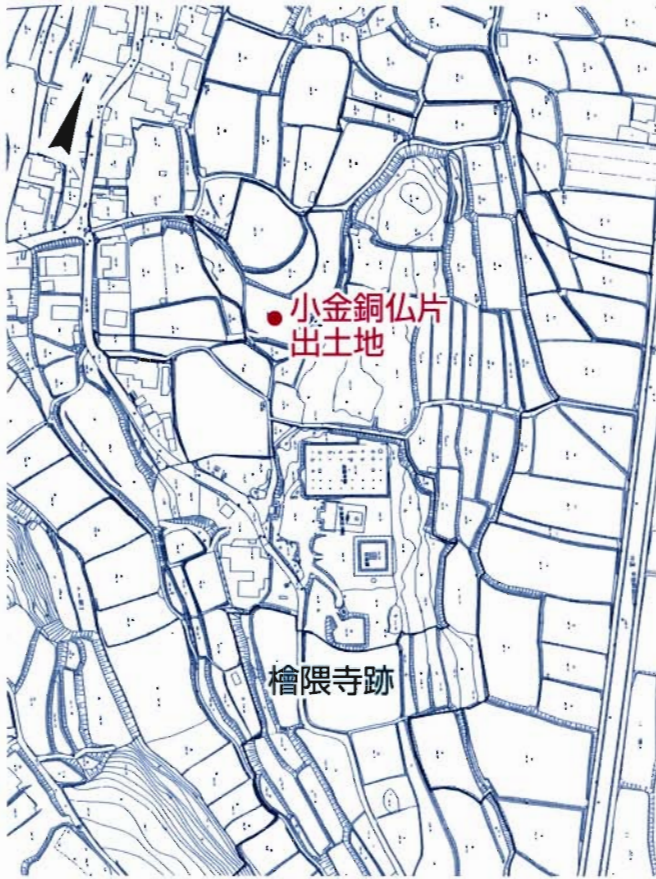
檜隈寺跡

出土 小金銅仏片



2008年6月

明日香村教育委員会



出土位置図



小金銅仏片 (実大)



出土調査区

1.はじめに

檜隈寺跡は、明日香村大字桧前に所在する古代寺院です。桧前は古代の檜隈郷に相当し、渡来系氏族である東漢氏が居住していた地域と考えられています。この檜隈寺とキトラ古墳の周辺一帯は国営飛鳥歴史公園キトラ古墳周辺地区として整備が行われることになりました。明日香村教育委員会では、平成19年（2007年）10月から公園整備に伴う発掘調査を実施しています。今回の発掘調査では、檜隈寺跡の北西部にある谷筋から檜隈寺にかかわる遺物が出土しています。小金銅仏片は、その谷筋に堆積した中世の遺物包含層の中にありました。

2.小金銅仏片の概要

小金銅仏片は、銅に鍍金を施した金銅製で、右手の手首から指先までの部分が遺存していました。指の遺存状態はよくありませんが、親指は指先をまっすぐに伸ばし、薬指は前方へ少し曲げた状態がみてとれます。人差し指と中指、小指が欠落しているので、仏像の印相としての手の形や組み方はわかりませんでした。ですが、指の断面が四角形状に角張る特徴は、飛鳥時代(白鳳期)から奈良時代、およそ7世紀後半から8世紀の小金銅仏に施された技法と似ています。また、指の一本一本を磨きだしていることから、より精緻につくっていることが窺えます。大きさは長さ23mm、幅10mm、厚さは手の甲で5mmを計ります。金、銅ともに純度は高く、金の発色がたいへん良いのがみてとれます。金の発色の良さは中国や韓国などで見られる古代の小金銅仏と似通っています。

3.まとめ

東漢氏は蘇我氏と結びついて政治、外交、軍事面に貢献し、渡来系の技術や仏教文化の導入に深く関わっていたと考えられます。今回の小金銅仏は、白鳳・天平文化の造形と推定され、これは檜隈寺の伽藍が最も整備され、東漢氏の全盛期にもあたります。その意味でも檜隈寺跡の周辺で小金銅仏片が出土した意義は大きいといえます。今後の調査によって、東漢氏と檜隈寺、そして檜隈郷の実態がより鮮明に浮かび上がることが期待されます。